



胴割れ米の発生を軽減する栽培条件

研究のねらい

近年、登熟期の高温による米の胴割れ発生（図1）が全国各地で増加し、米の検査時の格付けが低下する傾向にある。そこで、胴割れ米発生を軽減するための栽培条件を明らかにする。



図1 胴割れを生じた玄米（矢印）

成果の内容

- ①登熟初期の気温が高温にならないように水稻の作期を調整することで、胴割れ率は低く抑えられる（図2）。
- ②登熟初期にかけ流しの水管理を行うことで、胴割れ率が低くなる（図3）。特に、出穂後10日間の圃場内地温を下げることによる軽減効果が高い。
- ③窒素追肥により、登熟期間中の葉色値が高く維持されると、胴割れ率が低くなる傾向にある（図4）。適切な窒素追肥によって、止葉葉色値の過度な低下が起こらないように留意する必要がある。

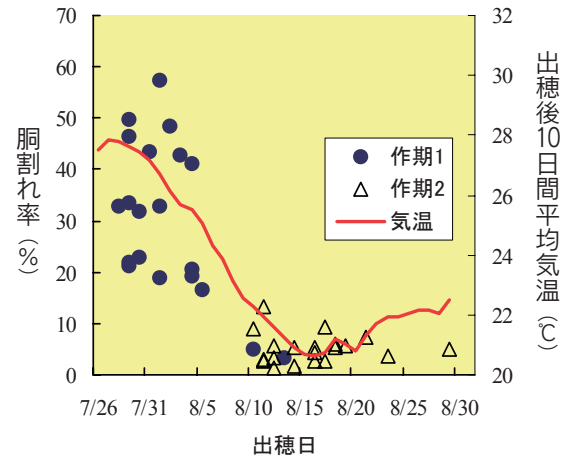


図2 出穂期と登熟気温および胴割れ発生との関係（2004年、19品種を2作期で栽培。作期1:5/13移植、作期2:6/3移植）

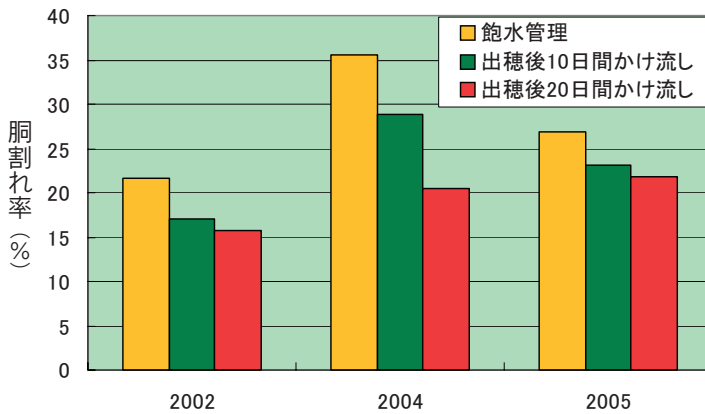


図3 登熟初期の水管理条件が胴割れ発生程度に及ぼす影響（品種:あきたこまち）

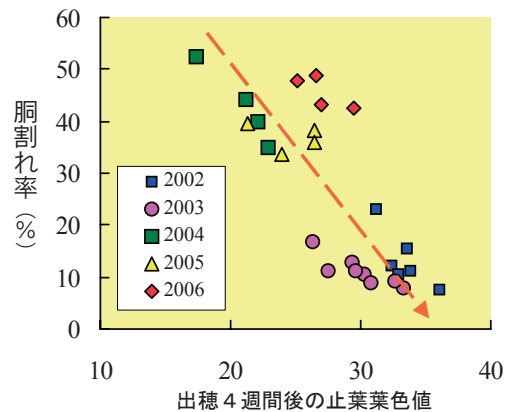


図4 登熟期の止葉葉色値と胴割れ率との関係（品種:あきたこまち）

成果の利活用

- ①胴割れ米の発生に対して従来から指導されている、早期落水防止や適期刈り取り、適切な乾燥調製技術と今回の成果を併用して発生軽減に努める。
- ②登熟期の適正な葉色値については、食味への影響に留意して設定する。